

(昭和六十三年三月十八日)

資料紹介

川平ひとし

第一に藤原定家の著作に関わる資料を一点、第二に『詠歌之大概』の江戸初期における享受の一端を示す資料二点(I・II)を、それぞれ解説文を添えて翻刻・紹介したい。

翻刻にあたっては、なるべく元の書写形態を保存するようにした。特に一は底本の字詰・改行・字体(漢字正略の別や異体を改めない。二については必ずしも右の方式に従わず、本文を追込むと共に通行の字体に改めた。ただし外題・内題の正字、本文中の一部の異体字(哥・調・舛に限る)、テニヲハの「ハ」の片仮名表記、濁点等は元のままとした。適宜句点を付し、()中に丁・表裏の移りの他、一部私勘を記した。

一 伝定家筆録『射法故実抄』

定家の作法書類 掲出した資料は弓矢の作法を筆録した書で『国書総目録』に藤原定家の著作として登載されている。奥書に抛ればもと一紙のみの片簡であったと思われ、現存写本も本文部分は墨付一丁分二七行に過ぎない。いま定家「自筆」から派生したと目される伝本によって検討・紹介したいと思う。

弓矢を扱う定家——言わば人ことばの人Vであった定家が言語的表現行為の他に、弓矢をもて扱うというような身体行為に相渉り、ここで見る資料をも書き遺していることは幾分か我々の想像力を刺激する。ただし弓矢と言っても、それは狩猟や、弓箭の道に連なる者が人の殺傷を事として行なうものとは異なる。定家の弓矢はもっぱら貴族の典礼としての行為に関わっており、当該資料もそうした領域以外のものではない。

ところで、よく知られているように定家は種々の故実書類を著録あるいは筆写している。それらの内の幾つかは歌人定家の営為や文学的志向の程を伝える資料となるもの⁽¹⁾の、他の多くは、一面から言えば非和歌的・非文学的なものである。ここでとり上げる資料は後者の類に属するとしてよいであろう。しかし、惣じて作家の書き記したものの——拡げて言えば全て染筆したもの——は何がしか当の作家の八思惟像Vを尋ねるよすがとなるという考え方に立てば、この種の「非文学的な」書かれたものの類にもまた定家研究の資料とし

ての存在意義を自ずと認めうるはずである。

底本 後掲する翻刻の底本は、東京大学史料編纂所蔵押小路家本（押小路家本・し・五六）である。⁽²⁾本奥書とそれに続くやや長文の書写奥書を照らし合わせると、本書は東園基量あるいはそれ以前の某人——恐らく前者か——が冷泉家蔵の定家自筆の一紙をもつて元の形態のまま転写したものを、基量から借受けた野宮定基が元禄十一年（1698）九月十八日、書写すると共に朱によって清濁を付した本ということになる。当該本は定基筆本ではなくその転写本であろうか。江戸中期写と思われる。本書の伝本は同じ史料編纂所蔵押小路家本にもう一本（押小路家本・し・一一）存するが、同本は底本の転写本である。⁽³⁾定基の奥書には、定家真跡に基づく本を書写しえたこととや、長く近衛の次将を務めた定家と同じ官職に在って、同職に関わる所見稀な作法の記録に接したことに伴う定基の感懐が細やかに記されている。互いに故実に深い関心を寄せ、また定家関係書にも親炙していたはずの定基・基量両者の交渉から、この種の写本が生み出されたのであろう。⁽⁵⁾

資料性 本資料を直ちに定家の著述と見做す前に、次のような疑問を提出することは可能である。

- (1) 真実定家「自筆」に基づくものであったか。
- (2) 「自筆」に拠ったとして、定家自記の著述と認定しうるか。
- (3) 分量と形態について見ると極めて断片的であり、何らかの不完

全な資料ではないのか。

確かに「自筆」の面影は稀薄である。底本は近世の書写本であり、その筆跡はいわゆる定家様を示している訳ではない。冷泉家に存したという原資料と直接照合すべくもなく、また今のところ定家の著作中に本資料と重なるものを確認できない、ということになれば、(1)・(2)は疑われてよい。特に(3)については、底本の扉書に、

射法故實抄 定家卿記中
援書也

とあるのも注意される。右の註記に従えば、本資料は本来然るべき分量を備えていた書から一部のみを抽出・抄記したものとなり、原状のままその記載内容を取沙汰するのは片手落ちということにもなる。⁽⁶⁾

しかしながら、既に見た本資料に関わる所伝や基量・定基らの眼識の程を一概に斥けるのは当たらないであろう。ここではそれらを信じて、冒頭に記した通り本資料は定家が弓矢の作法につき誌したものであると把えた上で、むしろ積極的に、定家論の材料に組入れるための手立てをテキストの中に求めてみたいと思う。

定家と弓

定家が弓矢の作法に触れ合う主な折や場として、正月の射礼、四月賀茂祭の警固や解陣、五月の左右近衛府の荒手結・真手結、冬の弓場始の年中行事の他、非常時の警固などを挙げうる。それらの際に求められるのは当然ながら規範に則った振舞いである。従って定家じしん常々弓矢の先例・故実に関心を寄せ、在るべき作法に関する知識の確認を怠らなかつたであろう。例えば『江家次第』

の射礼の「射遺事」の条を抄出した定家自筆本の伝存していることは定家の関心の程をよく証示している。⁽⁷⁾『明月記』に散見される弓矢についての記載も、その主要な関心は次第や作法にあったとすら言える。ただし職務・使命としての関心と共に、一面で定家には弓矢の行為そのものに對する興味があったのではないか、とも臆測される。なぜなら『明月記』に次のような記事を見出しうるからである。

依有見物之志、密行向馬場望見、已射了云々……依羽林之余勢猶出馬場、老狂之教奇歟
(嘉禄二年(1286)五月五日条)

左近の真手結を見るべく進んで赴いた時の記載である。六五歳参議民部卿の定家は既にかつての任務から自由であつたはずであるが、例の如き次第についての記述の前後に書かれているこうした文辞の中に、弓矢の営みに對する定家の好み——何がしか個人的に妙趣を覚えるところがあつたのであろうか——を読み取つてよいと思う。こうした義務と個的な興味の複合とも言ふべきあり方は、今問題にしつつある資料の記載を支えるものと深く通い合っているのかも知れない。この点をもう一步定家の行為の側に近寄つて考えてみよう。

弓に関わる諸行事の内、射礼の折には、『次将装束抄』や『明月記』建久十年正月一七日条に見える通り、次将たる定家は弓矢を相具して参ずるが、行事の場では矢を挿み弓を取つて着座して控え、射了のを見届けて座を起ち退出するという行為に従っている。荒手結の折には近衛舍人の演習に着(著)き行なり(少将の役か)こと

がありえたであらう。真手結には出仕して務めを果さねばならなかつたにしても荒手結同様弓矢を扱うことはない。⁽¹⁰⁾左近の次将であつた定家は右近の真手結を「見物」する折もあつた——もとより己の目を娛しませるためのものではなく、飽くまで事の様と次第を見守るのが主目的であつただらう。以上とは異なり、定家自ら実際に矢を射る折のあつたのは弓場始(射場始)である。すなわち『次将装束抄』の細註に云う「弓場始、射手之時」である。手ずから射手として矢を放つという直接的な体験に裏打ちされていたゆゑか、『明月記』の弓場始の記事は比較的精しくかつ生彩に豊んでいる。⁽¹²⁾

それらの記事を参酌しながら、改めて当面のテキストに眼を注ぐと、「無名門ヲ出テ継手に立」「矢尻當御所仍頗良に向テ立也」などの場所の記述、「前立」「後立」の別、「供御膳」の樣などから、「射手事」という標目のもとに記されている当資料は弓場始における射手の作法に関わるものと解するのが最も適わしいと推定される。

記載内容の特徴 短い分量ながら記載内容には一つの特徴が現れている。それは射手の行為の側に立つて叙述されている点である。無論「射手事」の標目のもとに射手の挙措を順序を追つて記しているのではあるが、次第の進行と事実とを觀る者の立場で客観的に記録するのではなく、むしろ射る当人の視点に立つて、作法と射法の要点を筆録しようとしていると見られる。腕や指の動き、軀の向きあるいは廻り方や捻り方、的を捉える視線、腰の動き、袍の袖の外し方、足の位置と踏み締め方、矢を番え射放つまでの動作と力の入れ

方などの、射法の技術的な細部を特有の術語を交えながら記している。「継手」に控えるところから「初矢」「乙矢」を放ったのち「供御膳」を吃えるまでの、射手の執り行なう一渡りの動作が、その場に臨む射手の心づもり——「ゆたう／＼して」「ゆたう／＼せで」の語に代表される。それは観者にとっては恐らく十分理解しにくい部面であらう——を含めて細かに録されているのである。

そもそも弓場始の次第のみについてなら、早く『西宮記』『北山抄』『江家次第』などの平安朝儀式書に詳細な記述が見られる。それらに比べるとき本資料は事実・故実の記載としては零細かつ断片的である。しかし射手の身体動作に立入って叙述したものとしては恐らく以前の儀式書類の当該記事には見えない特徴を備えていると思われる。実際に射手として弓矢を取って事に携る者には有益な手引となりえたことであらう。野宮定基が「然其作法舊記之中無所見、適此一紙詳註之」と云うのも故の無いことではない。そしてこれを筆録したのが定家なのだとすれば、ここに現れている射手の射法の内実に即した記述は、先記した定家じしんの営みを通して体得されたものと密接に結びついていたことになるのだと思われる。上述の側面に加えて、記載上注意されることとして次の二点を挙げておきたい。

(イ) 近代人✓の様を対象化している点。

(ロ) 所作の細部の流儀に関心を寄せている点。

(イ)は「次右手ニ片矢ヲ取 イタツキノキハヲ取テサカサマニ持矢端ヲ右袖ヨリ出シテ頗見 近代人無此事」の部分に現れている。袖を

外し「右肩ヲコム」という動作ののち、矢を番える以前の一連の所作の中に、矢を——的を——的ではなからう——熟視するという所作があり、「近代人」の射手にあってはこれが省略されていることを指摘しているのである。当の所作は射術上実質的な効果をもたらすものなのか、あるいは単なる装飾的な身振りに過ぎないのか詳らかでないが、己の了解している所作と「近代人」のそれとの相違を註しているのは興味深い。もともと、儀礼の細部における時代による変化、あるいは先例と近代様との差異について註記する姿勢は、旧くより儀式書類の端々に見られるところであって、当資料に特有のものと解する訳には行かず、ましてや近代批判の態度を過度に重視するには及ばない。しかし常に旧例と引較べつつ当代の作法の細部に神経を働かせて、近代人の様を対象化して眺めている筆録者の心の趣きを、先引の語句に読み取ることができようであらう。

(ロ)は乙矢を放ち了えたのちの所作についてのもので、「兼方カ流」と「公利カ流」と存し各々振りに相違のあることが云われている。

「兼方」は金葉集初出の勅撰歌人、秦兼方——金葉の作者名表記は二奏本「左近府生秦兼方」、三奏本「左近将曹秦兼方」。本により「左近」は右近とも——、『袋草紙』『故撰集子細』『雑談』や、『宇治拾遺物語』『今物語』などに名と説話の見える人物であろう。『続古事談』第五・諸道の、近衛舎人の務める人長に関わる話柄の中に、

今ノ世ニハ、秦氏兼方ガナガレノミスルコトニナリタリ。ソレダニハカト、シクナラヒタルモノキコエズ。(新校群書類従本)
とある。神楽の領域でも秦兼方の系譜あるいはそれにまつわる流儀

が、あつて『続古事談』の頃（目安は奥書に云う建保七年（1219））まで兼方の名と共に伝承されていたようだ。兼方の名は『奥義抄』下釈にも、

右近の馬場のひをりのひ

まゆみの真手結の日也、五月五日也、此日はかちのしりをひきをりたれば、ひをりのひとは云ふ也とぞ兼方は申しけれども、あらてつがひの日も引きをれり。おぼつかなし。

（日本数学大系本）

の如く見える。兼方は射法に関して一定の見識を有していたゆえに、手結の折の諸事や、ひいては古今集の詞書の難義についても一家言吐きえたのではなからうか。本資料に「兼方カ流」と記されているのには然るべき根拠が存したのであらう。

一方「公利」とは、『中右記』寛治四年（1090）正月十八日条、賭射の記事中に、

左近府生秦公利、中的其員三、末代之事、不異穿柳之芸

と能射ぶりを讀えられている人物と目される（増補史料大成本に拠る）。

「兼方カ流」「公利カ流」という記載は、これら院政期以来名聞を得ていた射手たちと結び合わせて、射法に関する流儀が取沙汰されていたことを伝えている点でまず注意される。と同時に、当の流儀が差し当り両流併存していることを聞き知って「云々」と伝聞体で記している筆録者の、門流にまつわる射法上の流儀や説に対する関心の程を示すものとしても重要である。

さて、以上の種々の特徴を帯びたテキストを他ならぬ定家が記し

たのだとすれば、我々はテキストの行文を通して、的を見定め足を踏み固めて弓を引き絞る定家の姿を想像し、併せて、定家の作法への関心の深さを改めて思うことになる。定家の△弓▽に関して我々が知っているのは、老年期の眼が把えた「纖月如弓高懸」（『明月記』貞永二年正月二日条）や、初期の歌什／あつさゆみまゆみつきゆみつきもせず思われともなひく世もなし／（初学百首・恋・六九）を始めとする和歌表現の中の△弓▽、すなわちもっぱら喩の中の△弓▽であるが、そうしたことばの次元の背後に——特に次將時代の定家にあるのは——生身を働かせる行為と、その行為にまつわる作法に拘泥する定家が在ったことを知るようになるのである。

述べたように、定家にとつての△弓▽はひたすら公家の儀礼に関わっていた。一方で定家は同時代の種々の△弓▽に触れざるをえなかったはずである。例えば武器としての弓をもて扱う武士らのいかめしい行動、あるいは後鳥羽院が主として近習らに行なわしめた狩・笠懸・小弓・流鏑馬・的立などの喧噪——それは既に宮中儀礼をやや逸脱して、結果的に遠く△軍事▽への投企に連なるものであった——。それらは時に定家の耳目を敬てさせたとにしても、仔々として作法を筆録する定家の△弓▽を支えていた指向とは別のものであったと言ふべきであらう。

本資料を定家論と結び合わせるためには、執筆された時期や目的、一紙のみという形態、あるいは仮名交りの文体などの問題を更に吟味すべきである。疑問は少くないが、ひとまず右のようなどころまで読解しておきたいと思う。

〈註〉

(1) 和歌懷紙の書式や歌合・歌合の作法を録した書については、別稿

「定家著『和歌書様』と和歌会次第」について——付「本文翻刻」——

〔跡見学園女子大学紀要〕20 一九八八(三) において考えてみた。

(2) 縦二八・一 cm 横一九・四 cm の袋綴本一冊。後補になる焦茶色鳥の子紙表紙。同左上のこれも後補の題簽に「射法故實抄」とある。扉

(扉書については後述)の綴り寄りに「押小路公亮本」と記した小紙片の貼紙が見える。

(3) 袋綴本一冊。中に挟み込まれている紙片の次の記載から、底本の転写本であることを知りうる。

(抄)

(4) 此一冊者依元本虫／損權僧都良宝／令書寫了／弘化三五月日

定基典書本の署名には、近衛次将として当該資料を書写するのであるという意識が現れている。それは「定基卿記」(史料編纂所蔵本(二〇七三・一一〇)に拠る)同年九月十一日条末(九月記の末尾)に見える署名「通議大夫行羽林府左衛中郎将藤原定基^才」と軌を一にするものである。

(5) 定基は基量と故実につきしばしば言談や問答を交し、その内容を同記中に転記している。例えば元禄十一年正月四日条の長い引用の後の「凡此夜説話如此類頗繁多、綿々及子夜了」や、十月二十六日条の「予問雜袍事基量卿、其問答註左」云々など。他にも基量の故実に関する知見に言及した記事は少くない。「基量卿記」(同前二〇七三・一〇〇に拠る)の側からも両者の交渉の様子を窺うことができる。本書書写時のやや前に「野宮羽林入来対談」(九月一四日条)などの記事がある。定基の定家著作への関心は野宮本「明月記」(東京大学総合図書館蔵)によってよく知られる。辻彦三郎校「明月記」第一(史料集 一九七一 統群書類従完成会)掲出同本典書参照。一方、基量と定家自筆本との繋がりを伝える例として「基量

卿記」元禄七年七月二〇日条の記事「自仙洞御写物被仰付、書付進上了、御神樂次第也定家卿自筆也」がある。右に云う次第の書は定家自筆本のある「臨時祭^{試案}」(一九四三 古典保存会)と同一であろうか。あるいは宮中御神樂の次第を録した書の定家自筆本が別に存したのであろうか。

(6) 引用した扉書の筆跡は本文の筆に同じとも別とも決しかねる。底本は定基以後の転写本とも見られるとすれば、扉書は基量あるいは定基自ら記したものでない可能性もある。奥書中の「本紙」(「もとの紙」であろう)や「此一紙」の字句は原資料自体例えは折紙の如き形態のものであったことを伝えているのではなからうか。

(7) 吳文炳「定家珠芳」(一九六七 理想社に影印所収。同解題参照。

(8) 例えば元久二年(1805)十二月六日条で、定家は、弓場始に関する自己の知見に照らし、また「旧記」所載の故実を勘合しながら、眼前の行事の進行や人々の所作を厳しく観察している。次の記載などに定家の関心の在りかはよく現れている。

「又仰云、的懸介、^{将監事思渡敷、為奇}二音未聞事也、^召

「雅行朝臣仰云、^{其早}的かへよ、又二音、奇而可奇」

「頭弁仰射手、念人等事、宗行書簡、^{速、}次進御所帰上御前読上

此等事不習知、

「入御之間無警蹕、為奇、頭弁允催出居之後、可申出御事也、

不知次将作法、

之所致也、」

同じく弓場始の作法に関しては、「二度之間時聲被切、其作法不尋常」(建永元年十一月二十八日条)や、少将教雅の問への答の中に、「是解人之教訓敷」「何人謬記乎」「末代将相、偏只以犯乱有其職……又見之無制止之人、悲代也」「偏是天狗之説敷(嘉禄二年十二月二十二日条)などの強い響きの文言が記されている。いずれも作法に関する自己の見識あるいは正説への確信に裏打ちされた言辭と考えられ、述べた点の例証となるであらう。

(9) 『明月記』建久七年五月三日条、承元二年五月四日条、嘉禄二年

五月三日条など参照。ただし少将の時期、定家がこの任に当たったことの所見は定かでない。

(10) 『次将装束抄』の「馬場騎射」の項参照。「束帶如し例、細領、丸」とあって弓矢の事は見えない。

(11) 『明月記』建久七年五月六日条。

(12) 就中、定家じしん射手に加えられた折——射手關如につき要請され、辞退したものの結局員数に加えられている——の次のような記事はその例となろう。

「本自不堪之上、肩病顯然也、三度之間寒風不可堪由雖相示……」
「予射了入無名門、即帰家、寒風難堪」

(建永元年十一月二十八日条)

「依肩所勞下向湯山、前夜罷帰今日出仕、猶非尋常之儀、況射手不可叶由申之、申殿下、猶可勤由仰之、只可立弓場之由懇申之……」

「湯後長途騎馬、右手之指不合期、不能引弓、極見苦……」
「霜夜寒氣諸病競発」

(承元二年十月十七日条)

(13) 弓場始の場合、二度乃至三度射ることになる。「度数依時儀、不_レ必三度」(『江家次第』増訂故実叢書本)「其次に仰度数以三度可為限之由」(『玉葉』承元四年十月十七日条。今川文雄『玉葉』(一九八四思文閣出版)に拠る)など参照。『明月記』の弓場始の記事にも三度乃至二度いずれも見える。

(14) ただし本資料の位置については問われねばならないであろう。射法そのものを具体的に記述した資料は無論絶後のことではない。鎌倉中期には貴族の儀礼の枠組の中で射法につき細かに沙汰した書が存在している。例えば、定家の同時代人で『明月記』にも名が見える持明院家時(保家男、侍従正三位)の言談を交じえて筆録したという藤原基盛著『小弓肝要抄』(「左近衛弓矢之事」)——その冒頭

近くに「近古有侍従家時卿、則当家之老哲、此道之達者也、百発能具備五善之鉢」とあり、跋文に「右条々大概如此、家時卿談義事共随思出所注之也」云々とある。(東京大学史料編纂所蔵『西園寺家記録』十三上(三〇七三・三六・一七)所収に拠る。『雑芸叢書』二(一九一五 国書刊行会)所収活字本を参照した——には、「時節事」から「矢尻事」まで二十条に分つて極めて具体的な本資料を凌ぐ——技術についての叙述が見られる。後代、射法は武家故実の中へと展開されているが、現実の武器としての弓矢の機能・役割に即応して、実戦的な射術は多彩に開拓・深化されたであろう。武家故実書類では、射法は弓矢を独立して扱った書あるいは諸儀礼と併せて沙汰した書の中で多様に叙述されている。自ずと『射法』という見通しを想定しうるが、それを細かに取沙汰する力は私に無い。本資料の史的位

置については更に吟味されるべきであろう。

(15) 久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江『今物語・隆房集・東斎隨筆』(一九七九 三弥井書店)「今物語補注」四七参照。

(16) 一歩進んで自己や自家の説を主体的に論う姿勢は、差し当りテキストには見られない。この点は、弓場始の記述の中で「弓ハ右腋ニ來様ニテ、以左右手取ル横前、弓末頗低矢ハツ以右手取加尻於弓、羽方ハ不副弓、頗放シテ、在前方、家説如此」と云う「玉葉」(承元四年十月十五日条)の姿勢とは異なっており、かつ本テキストの性格をも映している。

(17) 『明月記』元元元年五月一日条「近習人皆參、出京了」、同七月十一日・十五日条、建永二年正月二十九日・三十日、同二月一日、同四月二十八日、同五月九日条「今日新日吉小五月、貴賤競見、車馬馳奔、清貧不具、病氣窮屈勞無異——しかし為家を参入せしめ、かつ事の次第の聞書を転記してもらい——等の記事参照。

付記 翻刻許可を与えられた東京大学史料編纂所に対して深謝申し上げます。

〔翻刻〕

〔底本 東京大学史料編纂所蔵押小路家本

〔押小路家本・し・五六〕

射法故實抄

〔後補題箋〕

射法故実抄

定家卿記中
振書也

〔扉〕

射手事

替人初矢ヲ放テ後弓矢ヲ取テ無名門ヲ出テ繼手に立

祖方袖鰭ヲ弓に取具ス矢尻一寸許ヲ出テ弓ヨリ内に

取具

替人射訖退入テ後弓立に進立右廻的に後ヲ宛テ

立テ矢ヲハグ

〔濁点朱、以下同〕

矢ヲカリマタニ取テサシハグ矢尻當御所仍頗良に

向テ立也矢尻乾に當也

今片方ハサカサマニ尻ヲ弓弦ヨリ二寸許出テ取具ス

ハケタル矢ノウヘニ有

揚敷〔朱〕
對陽人射訖テ其矢取テ後ヒ子リムキテ的ヲ見ル

腰ヨリ下ハ不向〔不限一度
兩度モ弓〕

次袖ヲハヅス弓ヨリハ外ヨリハヅス右手ニテ右肩ヲコム

次右手ニ片矢ヲ取イタヅキノキハハ取テサカサマニ持矢驢

袖ヨリ出シテ頗見

〔二才〕
近代人無此事

次弦ヨリ右手ヲツタヘテハゲタル矢ノ驢ヲトラヘテ左廻三

〔歩に向的〕

立定テ袍前に弓ヲツカヘテ弓取タル手ヲハツシテ袖ヲ劔ノ

〔ウシロへ押遣〕

又肩ヲコム又腋ヲモコアテ弓ヲ取頗弓ヲ引テ左足ヲ前へ踏

〔一出テ〕

弓ヲカザシテ引テ射アイレト云コトアリゆたうくして葛〔如本朱〕
手〔墨丸アリ〕

〔一ス〕

右廻シテ如本のヲウシロニテ立定テ乙矢ヲハグ如初矢

對揚射訖放乙矢之儀如前但ゆたうくせで右手ニ弓ヲ取テ

左袖ヲツラスク弓ヲカイフセテ左廻テ入 兼方カ流ハ前

〔立ハ〕

左手ニ伏弓右廻後立ハ右手ニ伏弓左廻

公利カ流ハ前後共に右手伏弓左廻云々

供御膳之時

射手袖ヲ貫テ右手ニ弓ヲ取伏弓跪向坤龜坐

供訖立テ又袒テ矢ヲハク

本云

〔二ウ〕
以定家卿自筆令書写本帶有冷泉家

此一紙者借受基量大納言書写之彼奥書以定家卿自筆写之也夫為羽林之職統領宿衛禁軍故臨事携弓矢凡在此官

者不可不知射法然其法舊記之中無所見適此一紙詳註之且彼京極黃門在羽林二十年盡彼故実極其奥儀者也彼真跡可謂末代明鏡矣抑此記之跡註隨身之作法歟但至射法者不可有上下貴賤之分羽林次將之進退尤可准之仍深藏箱底以為小家之珍寶者也」
(三才)

于時元禄十一年九月十八日書写之且所々以朱付清濁早

羽林府左衛中郎將藤原定基

二 『詠歌之大概』 諸抄採拾

——近世和歌手引書類所載の註二種——

対象 △『詠歌之大概』享受史▽という視野とその含みもつ問題

については旧稿で考えてみた。⁽¹⁾ 当の享受の様を示すものとして、『大概』(以下略称する)の本文内容を対象とする抄註・講釈・聞書など、広い意味の註釈書の類が少なからず伝存していることは周知の通りである。それらの書を個別に検討・紹介する研究も既に幾つか提出されつつあるが、中世・近世における『大概』解釈の集積——言換えれば旧き研究史の富——を広く見渡しかつ個々のテキストを批判する作業は、このうち更に課題となるであろう。小稿もまた先学に導かれながらそうした研究への寄与を志すものである。

ところで特に中世における古註釈の研究は近時一段と精細の度を深めつつあり、対象としての古註釈の姿が次々と際やかになって来るにつれて、対象を把える方法如何——方法論の課題——もまた問われていと言うべきであろう。⁽³⁾

ここで採り上げるのは江戸初期すなわち近世の註釈書類である。いま述べた「方法論の課題」は近世の場合についても、中世のテキストとは異なったあり方で存在するに違いない。

江戸初期における『大概』享受 いまその状況を精度の高い見取図として指し示すことは容易でない。その理由は、個々のテキスト

の研究がなお十分でないこと、中世のテキストの研究状況も同様であつて、中世との重なりや差異の検討を通して近世の姿を指定するという所まで直ちに至りえないことに因る。と同時に、特に江戸初期堂上の領域においては大概はいわゆる「三部抄」の一つとして重視され、古今伝受を始めとする種々の伝受をめぐる形式や場や思想と結び合つて取沙汰されたから、それらの動態的な諸連関から『大概』の享受のみを切離して考える訳には行かないことも、事を難しくしている理由である。しかし一連の『大概』註釈書類が種々の系譜や階層に裏付けられながら伝存しているのだとすれば『大概』享受の様相を把握するという我々の視点はひとまず有効であり、その視点に基づく検討はやがて先述した「諸連関」を考える媒介ともなふと思う。現存テキストに基づきながら、いま仮りに——我々の足掛かりを得るために——江戸初期における『大概』註釈書類の圏域として次の四つを想定しておきたい。

〔1〕宮中仙洞の圏域——後陽成院・後水尾院・靈元院の系譜を軸とするテキスト群。

〔2〕親王・廷臣の圏域——道晃法親王あるいは近衛信尹・中院通茂・鳥丸光栄らによるテキスト群。

〔3〕八地下一流⁵⁾の圏域——望月長好・平間長雅とその門流圏によつて支えられたテキスト群。

〔4〕それ以外の非公家の圏域。

以上の〔1〕～〔4〕は——例えば〔2〕は〔1〕の註説を依拠すべきものとして受容しているなど——相互に影響し交錯しながらそ

れぞれ相対的に独自の『大概』享受の広がりや成していると思される。そしてこれらと中世以来の註釈書類の享受とが複合して江戸初期における『大概』享受の状況を形成していたと捉えておきたい。右に列挙した所に従えば、小稿で紹介する資料Ⅰ・Ⅱの二種は共に〔4〕に属するものである。

手引書類の中の『大概』註とその基盤 作歌上の技術・作法・指針あるいは歌学や古典に関する知識・教養を、主として啓蒙的な筆法で記述・集録した、仮りに「手引書」と呼ぶ書が多彩に存在している⁶⁾。それらの書は江戸初期以降板行されて広く流布するが、いま採り上げる『大概』註二点もその種の書の中に収められている。手引書類が何時どのような要請に支えられて何故登場したのかは興味深い問題であらう。ただしそれを具体的に考えるのはここでの主旨から外れる。当面我々にとつて重要なのは、手引書形成史と江戸初期における『大概』註釈史あるいは受容史とがどのように触れ合っていたかという問いである。二種の資料は右の問いを考える一つの機縁となるに違いない。

ところで啓蒙的な板本の手引書類にまで『大概』註が摂入されていることには一つの背景が存在した。後述する通り資料Ⅰは元禄十五年(1702)刊、資料Ⅱの元になったものは宝永元年(1704)刊であるが、これらの発刊された元禄末年から宝永初年頃に先立つて、『大概』を含む註釈書類が統々と版行化されていたのである。すなわち、寛永十五年(1638)『三部抄之抄』刊。

承応元年 (1652) 『和歌七部之抄』刊。

寛之八年 (1668) 細川幽斎『詠歌大概抄』刊。

寛文九年 (1669) 加藤盤斎『三部抄増註』⁽⁷⁾刊。

の如くである。これらの刊行と流布はⅠ・Ⅱの出現を準備したと言つてよい。例えばⅠ・Ⅱが頻りに宗祇註・幽斎抄を参酌しているのも右の諸抄の刊行なしには考えられなかったであらう。

以下、当該資料の具体的な性格につき略記してみよう。

〈資料Ⅰ〉

書誌 Ⅰは『統和歌極秘伝抄』に収録されている。無論「統」に先行する正編が存在した。その間の刊行の次第を現存伝本の状況に即して整理して言えば以下の通りである。

元禄十四年 (1701) まず『和歌極秘伝抄』一冊が刊行されている。

刊記に

元禄十四辰宿辛巳五月吉日 教来寺彌兵衛板行

とある。これには刊記の年月と同じ年月を記した次のような序文が見える。

ふみとものやるべきはやりてんとてあまたとう出たる中に、ことなるもこそあなれといひあへる程にとりて見れば、そのかみ何人のいかに見よとてかあつめ給へ置しもしらず、世の人のたやすからずいふめる數嶋の道のくまゝを手ならひのやうにかいつらねてしかもおほろけの物にしもあらざるを、いた^(一オ)づらにしみの住家になさんよりハしはしあづさにつらねてをとて

なん大泉堂のぬしのかく思ひたち給へるよしせうそこし給ふのつゝ、是が詞つくりてよとひたすらのこゝろさしももだしがたく思ふ給へながら、さりとてしどけなかつたなりなる筆をくわへんもつゝましさに、たゝかのありしせうそこのかへしするつゝでもしかうはかな^(一ウ)き事もいはるへくやといさゝかおもほしかる筋をすさひすてしとなんひろひとりてさなから此ふみのはしにそへられて侍りとそ

元禄十四年辛巳年

早苗月

この序文の後に、目録題・目録、続いて内題「和歌極秘傳抄」と「哥の留り字の事」以下の本文がある。本文五一丁。

本書の伝本としては徳島県立図書館蔵森文庫本(W・九二・一、ワカ)^{*}、長谷寺豊山文庫蔵本(和歌・二)^{*}、酒田市立光丘図書館蔵本(和歌・二一 序文欠)などがある。板本の写しと思われる写本に、^{*}上田市立図書館蔵藤廬文庫本(文学・歌学・一九〇)、^{*}中田剛直氏旧蔵本(ナ・三 一部に省略あるいは追加あり)、国会図書館蔵本(二三・一二四)などがある。例えば、国会本には政変の手が加わっている模様で、先引序文中の「大泉堂のぬしの」を、刊記との整合を図ったか、「教来寺のぬしの」云々と書き改めている。

この正編に続き、翌元禄十五年、当該註を含む『統和歌極秘伝抄』の刊行をみている。刊行の趣意は序文に次のように記されている。

道のちまたのわかれん事をなげきしハその南にすへく北にすへきかゆへとそ、哥の道もしかなり、末ゝに成てハ人の心同しか

らす、さまざまの書いてき、みるものとひやく末葉にかゝはりて本とする処をわすれ無益の事に心をつくす人も有ぬ^(一)へし^(二)しかるにいにし年誰人やらん和哥秘傳抄といへるものを撰て世におこなはれ侍る、此度又それにもれたる秘事口決等を書あつめ、かつ哥をよむおほむねをのへ初学に使あらせんとする文あり、書林これを得て梓にちりはめ名付て續和^(一)、謂秘傳抄といふとぞ、まことに涙のまさこのつきせぬ言の華なれハまさきのかつらなき世のもてあそひとも成なんと筆をそふるものならし

于時元禄十五の壬午の春

梅咲宿にして序之^(二)す

統編の形態は正編同様、目録題・目録ののち「和哥よみかたの事」(この標目は目録にあつて本文中には不見)以下の本文がある。丁付は七十五まで。ただし中に「三十ノ四十」「六十七十」の如く重複を含むゆゑ本文実数は五五丁。刊記もまた本編に似て次の如くある。

元禄十五年 撰陽 玉蘭堂太良兵衛

蔵板

早苗月 花陽 教来寺弥兵衛

この統編の伝本は高岡市立図書館蔵本(底本)、刈谷図書館蔵本(二六四五・一・三甲五・七八七)、祐徳稻荷神社寄託中川文庫本(六・二二・一・三二九)など。九州大学中央図書館蔵音無文庫本(五四三・ソ・一)は板本の写しと見られる。

以上の正編・統編を合刻したものが存する。祐徳神社中川文庫一本(六・二二・一・三五〇〇)はそれであり、同じく合刻した天明二年

(1782) 版の早稻田大学図書館蔵本(ハ四・一四一六)も存する。天明二年版は先引正編序文の年記を「天明二年／との初春」に、統編末の刊記を「天明二年／寅正月 東京浅草北東仲町／浅倉屋久兵衛」にそれぞれ差替えている他、序文・目録にも手を加へ一部取捨しているが、本文部分自体は以前の版と同一である。

註文内容 資料Ⅰの註文内容の特徴を摘記しておく。

(1) 全体を覆っている特徴として第一に啓蒙主義的な付註態度を強調しておきたい。「初心の人」云々、「幼字の人に示ス」などの言辭に端的に現れている通り、初学の読者を想定して然るべき正しき知識を教示しようとする姿勢は明らかである。その姿勢は時に啓蒙臭とでも呼ぶべきものを露わにする。例えば「三代集」「八代集」「三十六人集」などの諸事項につき煩雑な程に常識的な解説を施している所などがそうである。しかし、そもそも啓蒙主義的姿勢は先に引いた本書序文中の「初学に使あらせんとする文」に既に窺われる通りであり、この側面こそは入手引書Ⅰの本性に関わるものだと言えよう。

(2) 『大概』の論述内容の位置づけ方に留意したい。後掲翻刻の冒頭部分の連なりによく現れているように、『大概』は一面で題の詠法を具体的に例示した部分と一続きのものとして扱えられている。『大概』註の部分は目録の標目に云う「和哥よみかたの事」の中に位置づけられ、その主要部分を占めていることを改めて想起したい。同時に『大概』は、

抑此道にいらんには詠哥大概を心にかけて師にもきゝみつから

もじゆくとくすへき事也

とある如く、必ずや学ぶべき歌道の書とされている。我々にとって本資料は確かに『大概』註釈書類の一つではあるが、付註者と読者とが構成する地平の上では、『大概』は飽くまで詠作上の技術的な指針であり、かつ「道」に入るための基本的な規範の書なのである。

(3) 付註者の依拠している先行註釈書とその受容の在り方に注意したい。直接名を挙げて参照されているのは宗祇抄と幽斎抄しかもほとんどこの二書に尽きている。ただし『和歌七部之抄』も参照されていた証跡が幾つか存在する。例えば「求人未詠之心詠之」の註の中に「……よし称名院も仰せられしとなん」と三条西公条の所説を引いているが、直接公条の註書に拠ったのではなく恐らく七部之抄の記載を援用したのであらう——そうだとすれば両者比較するに正確な引用とは言えない。また「為知物由」の「物由」に「コトノヨシ」と傍訓しているのは——「コトノヨシ」の訓は実隆説とされる。「モノノヨシ」「コトノヨシ」の適否は早くより諸抄の言及するところであった——仮名本『大概』の本文「ものゝよし」を挙げつつも「但ことのよしと可レ読」とする七部之抄の所説に拠ったものと推測される。板本『和歌七部之抄』か、あるいはその元になった宗養抄のいずれかを参看したのであらう。

(4) 宗祇・幽斎の両抄は単に粉本とされているのではない。

宗祇抄ハ聞書を板行せるもの故さまく也、幽斎抄ハ事繁多にして初心の人見まどふ故

云々の、祇抄の乱雑、幽斎抄の煩瑣を云う言に現れているように、

一定の距離を置いて両抄を参酌しようとしている。そして所々に批判も見られる。「七八十年以来人所詠出之心詞」云々の原文に対する宗祇註を引いて、「愚案するに此説少あたらず」と云い「今案するに」として自説を対置したり、「和哥無師匠」の段で「宗祇曰」と祇註を引きこれに「愚案」を対置しているなどはその例である。両抄に準拠するところ多いのではあるが、中に含まれている註者の個人的見解に根差した註文は当該註の独自性をもたらず要素となっている。ただし今のところ註者が誰であるかは詳らかでない。

底本 底本として高岡市立図書館蔵本(九一・一、二四〇)を用いた。同本は縦一六・二cm横一一・三cmの小本一冊。紺地表紙。同中央後補の題簽に「續和哥極秘傳抄 全」(「極」の字は近代の補記か)と墨書。本来の刷題簽にも同様の外題が記されていたと思われる。

△資料Ⅱ▽

書誌 資料Ⅱの付註者は素兄堂止静と考えられる。止静は「元禄から享保頃」「にかけて、和歌に関する啓蒙的な内容の書物を著している」(『和歌大辞典』「止静」項)⁽¹⁰⁾とされる人物である。当該註の本文は『歌道読方と調海』五卷五冊の巻五冒頭に収録されている。

「歌道読方と調海」なる書名は右の五冊本のうち一・二・四・五の各冊の内題に見えるが、三冊目の内題はこれを欠き、同冊の内容を示す標目「てにハ秘傳抄」のみを持つ。そして五冊とも外題は、「^{根柢}秘傳^{てにハ秘傳抄}」(「五」)の如く刻されている。見られる通り、これらの外題・内題は一種の錯雑した現状——他に、目録と排

列の不一致、一面の行数の不揃い（一・三は八行、四・五は九行）、柱に見える丁付の乱れもある——を呈しており、当該書には複雑な成立ないしは刊行の過程のあったことが窺われる。彼れ此れ勘合して言えば、次のような事情を想定しうるであらう。

現状の五冊本のうち一・二は本来『歌道垣根の梅』として元禄十六年（1703）に刊行されたものであり、四・五の内容は宝永元年（1704）

〔補記2〕

序、同二年刊の『歌道岸の姫松』に相当する。先行の角書にも見える「垣根梅」「岸姫松」の両書を併せ、かつ宝永二年九月単独に刊行された『てにハ秘傳抄』^{〔補記3〕}をも吸収して一具と成し、全体の書名を「歌道読方と調海」（外題左傍の名で言えば「よみかた和かのうみ」と）すると共に、序文・目録に幾分かの整序化を施して合刻したのが五冊本である。これら五冊に収められた諸書は惣じて止静の著録になるものとひとまず考えられる。ただし五冊本には全体の刊記が見えない。それゆえ五冊本の編成もまた止静の手になるものなのか、あるいはのちに書肆が取り纏めたものかの結論は留保しておきたい。

このように『歌道読方と調海』五冊本は種々取り合わせた形の書ではあるが、結果的に歌題・テニヲハ・書式・歌体等を始めとする和歌詠作をめぐる雑多な知識を糾合した入手引書Vの姿をよく映し出した書となっている^{〔12〕}。

さて当該註はこうした書の中に据えられている。次にその配列上の位置を見定めておきたい。先述したように五冊本のうち四・五は一纏まりを成しているが、その内容を標示した第四冒頭の目録には次のように記されている（上段の数字は私意に付す）。

歌道読方と哥海四

- ① 第一 詠哥大概の事
 - ② 第二 雨中吟未来記の事
 - ③ 第三 百人一首の事
 - ④ 第四 つれ／＼草之事
 - ⑤ 第五 伊勢物語の事
 - ⑥ 第六 源氏物語之事
 - ⑦ 第七 定家卿系図二条冷泉両家の事
 - ⑧ 第八 哥道師資相承古今傳授血脉之事 已上
- しかし第四に収められているのは②④⑤のみであり、残りの①③⑥⑦⑧は（この順番で）第五に輯められている。また柱刻の丁付を辿ると、本来①③④⑤⑥⑦⑧の順番に配列されていたと思われる。然して四・五両冊の元になった『歌道岸の姫松』によって当初の配列を確認しうる。結局当該註は『歌道岸の姫松』で言えば一冊目冒頭に、『歌道読方知調海』では第五冊の冒頭に置かれていることになる。ここでは後者のテキストに拠って翻刻・紹介する。
- なお付註者の止静には本書以外にも幾つかの編著書が伝存している。それら止静の著作全体を俯瞰して本書を改めて位置づける必要があらう。それについては別の折を期したいと思う。^{〔13〕}
- 註文内容 資料Ⅱの註文の特徴につき、Ⅰの場合と同様に略記しておく。

- (1) 外題に「よみかた」の文字が刻されている通り、また註文中に古来、よみ方の書多しといへども初学より已達に通して是にしく

ものなし

とある通り「よみ方」の規範の書たる『大概』⁽¹⁴⁾を現実の詠作の手引とすべく註するという執筆態度（そして編録態度）が貫かれている。

この側面は先にⅠの性格の(2)として述べたものとはほぼ同様である。

(2) 冒頭の成立・題号をめぐる説は詳細である。しかし以後は——

「題号の「詠」「歌」「大概」の字義を細述している段を除けば——『大概』の原文自体を掲出して行文を追いつながら註するという姿勢が認められない。原文はわずかに註全体の末尾辺りに、文言を抄記したと言ふべき体裁で引かれてに過ぎず、全体に註書としては粗放な印象を拭い難い。

(3) 逆に余剰とも言える付加的な記載が見られる。「抑哥は此国の風也」以下の、和歌の草創を長々と述べる部分がその例である。この種の註文は幽斎抄の「和歌之濫觴事」にも見られるが、本註は幽斎抄に影響されながらも、同抄を引き写すのではなく独自に敷衍していると思われる。ただし当の起源説の内容に特記すべき独自性があるとは思われない。

(4) 先行註のうち書名を挙げて引用しているのは「宗祇注（抄）」「幽斎抄」の二書。ことに幽斎抄に拠るところが多い。「幽斎抄に」として引く部分は同抄の文言そのものと完全には一致していない。恐らく同抄の板本に拠りつつも原文通り正確に引用するという態度で臨まなかったであろう。一方「宗祇注」として引く内容は全て『三部抄之抄』の記載と符合する。祇註のテキストを直接参照しなかったばかりでなく、『三部抄之抄』の所説を宗祇註として理解し

ていたであろう。中世の註書を享受する際の一つの姿を示しているよう。他に「三光院の御説にも」云々など、幾人かの人名とその所説が引かれているものの、いずれも他資料よりの孫引か——例えば三光院説は幽斎抄より——と思われる。

(5) 先行註に対して註者の主体性が示されていない訳ではない。『大概』の執筆対象の条で「宗祇抄」（実は『三部抄之抄』）を引いて「これハあまりになる注ナリ」「是等せんぎのたらぬ故也」と批判している箇所や、『大概』成立時期につき諸説を紹介したのち「考るに」云々と異見を提示している箇所などは一種の個人性に立脚した言説となっている。

(6) 冒頭辺の『大概』の成立や題号に関する論には、後水尾院抄の影響があるのではなからうか。^(ママ)「留連録」の引用、『大概』の定家「自筆の本」「自筆似せ書の本」、「浄満寺准后の御説」^(道登)「称名院殿御抄」、仮名本『大概』への言及などは後水尾院抄に見えるところであり、当該註は同抄を——あるいは同抄を継承した何がしかの資料を——参酌したと推測される。就中、仮名本『大概』の奥書に関する記載は注意される。仮名本奥書は後水尾院抄や霊元院抄に見えるが、本註もまた次の如く引用している。

件の本にハ阿仏奥書有、京極黄門定家卿梶井宮へまいらせられ
けるとなん、誠にゆへあるかな、可秘く云々

引かれている文面はまさしく後水尾院抄・霊元院抄の所引そして現存仮名本の一本である東京大学国語研究室蔵本所載のものと一致する。しかし「阿仏奥書」という認定はそれら諸書には見えず、甚だ

興味深い。そもそも仮名本『大概』の成立については不明な点が少なくない。右の奥書の由来も問題点の一つに他ならない。これを阿仏尼のもの——すなわち同奥書は阿仏尼による加註奥書ということになろう——とする言説は新たな視点を提起するはずである。此の言説は止靜自身の見解というより、むしろ何人かの説あるいは何かの根拠に基づくものなのであろう。この種の所伝が江戸初期——恐らく本註以前に——確かに存在していたと思われる。

底本 『歌道読方と調海』の伝本として今のところ唯一知られている都立中央図書館蔵加賀文庫本（加賀文庫・六九二七、一〇五）所収本を用いた。同本は統一五・八cm横一cmの小本。表紙は白地に藍色により劔亀甲と丸に若松梅摺。同中央の茶色子持梓刷題箋に別記した外題が刻されている。当該註の本文は底本五冊本の第五冊目一丁表から一〇丁表まで。

まとめ——Ⅰ・Ⅱ共通の性格 Ⅰ・Ⅱは八手引書Ⅴの中に組入れられた註として互いに共通した諸側面を持っている。それらを取纏めて記しておく。

第一に、両註は共に、かつて私に「序文化」と呼んだ思考形態——すなわち、本来一体のものである『大概』の論述部と例歌部「秀歌之躰大略」とを分離し、前者のみを八手Ⅴとして享受する——に支えられている。序文化——その発生は問題となるが——は江戸初期には一般化して『大概』受容における一つの枠組を成していたと考えられる。いま見る両註もまた時流の枠組から自由ではない。

第二に、『大概』註の板本化され流布するのに伴って、特定の場で限られた聴聞者を相手として説の授受が執り行なわれるという形式から、より広く不特定の対象に向かって付註者の見解が提示されるという形式へと——誤解を恐れずに言えばオーラルな側面を含みもった形式から書かれたものによって支えられた形式へと——享受の形式の変転して行く条件は既に成熟していたと考えられる。両註の註文内容や付註者の執筆対象に対する意識の中にもまた、右に述べた変転の兆が自ずと滲み出ているように見える。大雑把には『大概』註の通俗化ないしは大衆化と呼ぶべき推移の中に伏在しているものの意味を更に考えたい。

第三に、既在の諸註に依存する一方で、それらを自在に勘案しながら独自に、個人の見解に根差した説を呈示しようとする姿勢が顕われている。先に一種の個人性とも主体性とも呼んだものが認められるのである。

第四に、右の面と共に、付註者の姿勢には、旧来の制度や権威に依拠することで註説の由緒や継承性を確保しようとする側面も併存している。資料Ⅰの「二条家冷泉家の骨ずひ也」「予か聞ける大意を記して」云々や資料Ⅱの「道統の人に逢て可習もの也」などの言辭はその種の姿勢を映し出すものであろう。

終りに、先に作業仮説として設定した『大概』註の四圏域を想起しつつ資料Ⅰ・Ⅱの位置を考え直してみたい。既に述べた通り、Ⅱは圏域（Ⅰ）に属する後水尾院抄あたりと重なり合う部分を含んでいる。またⅠ・Ⅱの註説の一部には共に〔3〕に見られる言説と符

合する節も認められる。⁽¹⁷⁾しかしながらⅠ・Ⅱには、「1」「2」の堂上世界とは親和しない用語法が含まれており、一方「3」に特有の門流意識は認められない。つまり「4」は他圏と連関しながらも一つの圏域を成していると考えられるのである。このようにⅠ・Ⅱの検討を通して幽かに圏域「4」の縁辺を画しうるように思う。しかしその境界はなお曖昧なままである。と言うよりも、江戸初期における『大概』註の諸圏域は単に靜的に分散したまま存在していると捉えてはならないことを、Ⅰ・Ⅱの諸相そのものが示唆しているのだと思われる。

〈註〉

(1) 川平「真名本から仮名本へ——『詠歌之大概』享受史」掲定のために——『跡見学園女子大学紀要』19 一九八六・三

(2) 個別註書を広い展望の中に位置づけた井上宗雄『中世歌壇史の研究』三部書、書陵部本を中心に諸抄を整理した土田将雄『細川幽齋の研究』(一九七六、笠間書院)を参照。個別研究では、宗祇註について久松潜一・上田将雄『詠歌之大概』(影印本、祇註の翻刻と解説、一九六七、笠間書院)、九条種通抄について國松由理・山田洋嗣『詠歌大概』(種通抄)——翻刻と解題——(一九八二、(三))『立教大学日本文学』53・54・55 一九八四・一二、八五・七、八五・一二、幽齋抄について土田前掲書その他、福井迪子・西丸妙子『詠歌大概聞書』(在九州国文資料影印叢書7 一九七九、在九州国文資料影印叢書刊行会)参照。なお宗祇註について最近、今井明「詠歌大概宗祇注の基礎的考察」(口頭発表 一九八七・一一、早稲田大学国文学会大会)を聴いた。

(3) 『大概』註を軸としながら註說世界の広がりや方法論の課題を示

唆する論として赤瀬信吾「心・意・識の論と和歌注釈」(和漢比較文学会編『中世文学と漢文学Ⅰ』和漢比較文学叢書5 一九八七、汲古書院)参照。

(4) 仮りに宝永頃までを目安とするが、今やや緩やかに考える。

(5) 日下幸男「平間長雅年譜——地下一流の古今伝授——」(『高野山大学国語国文』9 10 11合併号 一九八四・一二)、同「地下一流の古今伝授」(横井金男・新井栄蔵編『古今集の世界——伝授と享受——』一九八六、世界思想社)

(6) 類題集・名寄類等を加えれば「手引書」の概念は更に広がる。

(7) 小高道子「『三部抄増註解説』(有吉保編『三部抄増註・三十六歌仙和歌抄』加藤磐斎古注集成6 一九八五、新典社)参照。

(8) 伝本名の肩に*を付したものは国文学研究資料館蔵マイクログフィルムに拠る。以下同じ。

(9) ちなみに「和歌極秘伝抄」所収内容を目録によって示すと(本文中の標目と正確に一致しない場合もある)、正編は「哥のとまり字の口伝」「詠哥制の詞口伝」「百人一首五哥の口伝」「同他流の口伝」「伊勢物語七ヶの秘事」「つれく草三ヶの口伝」「古今和哥集三鳥の口伝」「同七首の秘事」「三木の口伝」「一首十鉢」「一首五鉢」「木綿襷之哥」。続編は「和哥よみかたの事」「つれく草題号の口伝」「同三ヶの大事」「同七ヶの口伝」「源氏三ヶの口伝」「伊勢物語題号の口伝并業平の事」「やまと云訓の口伝」「哥といふ訓の口決」「三十一字起の口決」「遍序題曲流の口決」「三十六哥仙の口決」「人丸の事」「赤人の事」「小町か事」「猿丸か事」「枕言葉の事」「長哥」「短哥」「旋頭哥」「混本哥」「折句」「香冠」「廻文」「はいかひ」「てにへ略哥」「古今六義略哥」「らりるれろなき哥」「為氏かくし題の事」「為相言葉楓の哥」「為兼配所にて卅三首の哥」「六所の玉河の略哥」。中世以来の知識がどのように組入れられているか、一々について精査してみるべきであろう。例えば末より二条目につ

いては、井上宗雄「伝為兼資料二つ——いわゆる『為兼卿三十三首』と『詠源氏物語巻名和歌』（解説と翻刻）と——」（立教大学日本文学）55 一九八五・一二）参照。

(10) 渡辺守邦稿（一九八六 明治書院）。

(11) 反って所収内容と食違いを来している面もある。例えば一冊目の序は、

歌道読方和哥海序

博く学でこれを約やかにし多く聞て疑を闕と、信なるかなや是言や、夫和哥の道もしか也、然るにひろく学ばんとすれば書抄繁く約に習んとすれば秘事口決容易からず、故に哥道に志ふかき輩も濫奥を知事難し、因てやつかれ年月耳を玉津嶋の波にあらひ心を住の江の月にすまして記得する所の和哥要約の大概秘事口決等を編集す、其初に八題を取て哥を詠する心得をあかし五義三鉢五鉢四品四病八病六義等の次第をたて、終には和哥三神の口伝彼是和哥の格物成べき事を録し行こふ人のとよめる古哥にもとづき読方海と題して艸稿までにして止め、一日書林来りて是を見て厚く賞断し海に書肆をして梓に鑿めしめんと請ふ、僕元来才短く殊に書巻を蓄ざれば詞の俗覚悟の未練またハ考索のたがひなど覺束なし、何ぞ世にあらはし嘲りを招んやと固く辞すといへども敢てゆるさず、そのとる事に益あらばなんぞ詞富麗の工ならざるを恥るやと其實に答ふるもいと煩しく狂して其需に應ずる物ならしの如くであるが、『歌道垣根の梅』の序を転用し、書名部分を差替えた結果、全体の構成と矛盾を来たし、かつ「行こふ人のとよめる古哥にもとづき」——むめのはなかなねにほふ山ぞとはゆきかふひとのころをぞみる（後拾遺集・春上五八）——という書名の由来も意味を失うことになっている。

(12) その様相を目録の記載によって窺ってみよう。煩を厭わず掲出してみる。第一の目録に（傍訓あり、略す）「読方の習并題心得之事」

（歌題を列記、いま省略する）「てにハ大概の事、悉皆秘伝抄ハ三の巻ニ有」「哥の題組やうの事」「懷紙のかきやうの事」「詠草書やうの事」「并ニ図式」「短冊書やうの事」「并ニ図式」「五義三鉢の事」「五鉢四品の事」「五字の大事」「四病八病の事」、第二に「和哥六義の事」「同口決の事」「五句の和哥の事」「同五ヶの口決の事」「九章の事」「親句の事」「疎句の事」「正句の事」「求風情和哥の事」「同故実物語」「ほのゝ哥正伝」「百人一首定家卿哥伝」「印のけふりの古事」「傍題の哥の事」「落題の哥の事」「隱題の哥の事」「月の異名の事」「同読方心得の注」「さころもの事」「同三ヶの大事」「万葉集の事」「廿一代集の事」「八ヶの柏秘名の事」「同証引哥」「和哥の五句五行に配当する習の事」「和哥の三神正伝」とある。第四の目録は後掲する。

(13) 例えは「源氏物語道しるべ」（宝永三年刊 静嘉堂文庫蔵本 五一・三・一五、二二一九五）に「猶岸の姫松と題せる書に述るもの也」などであり、著作相互に関連のあることを知りうる。

(14) この種の意義づけ自体は早く頼阿『井蛙抄』や『了俊一字伝』あたりに遡りうる。近世の場合は、享受対象の階層的な広がりにおいて中世と異なる。

(15) 久松潜一編『歌論集』（一九七一 三弥井書店）所収。

(16) 註1参照。

(17) 例えは、『大概』の成立事情に関して尊快が定家に対して「三十首の哥を詠して定家卿へ添削を乞ひけるに」云々（I）に拠る。IIにも同様に「見える」という事情を考える説は、平間長雅の『詠歌大概講談密註』（東洋文庫蔵本 三Fa・五二）の頭書に「先師云」として見えるところと関連しているのではなからうか。

(18) 例えはIIの「今も禁裏に正月御会始に披露発声と云事有、吹物にあはせらるゝ事も有」「此本冷泉家に御所持也」などの口吻。

△翻刻△

I 『統和歌極秘伝抄』所収「和哥よみかたの事」

(底本 高岡市立中央図書館蔵本 八九二・一、二四〇〃)

續和哥極秘傳抄 全 (書題箋)

古今集抄云やまとゝハ此国の名なり、哥ハ此くにの風なり
といへり、しかれば日のもとにむまれんもの誰かこの道を
まなばざらんや、ちからをもいれずして天地をうごかしめ
に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ男女の中をもやはら
けたけきものゝふのこゝろをもなぐさむるハ哥なりといへ
り、為家卿口伝にいはいはく、哥をよむ事才学によらず、
心よりをこる事と申たれどけいこすくなくしてハ上手のお
ぼへとりかたし、自然秀逸をよみいでたれど後に比興の事
などしいだしつればさきの高名もけがれていかなる人にあ
つらへたりけるやらんとひはうせらるゝ也、さやうになり
ぬれはものうくて哥をすつる事あり、これすなはち道のす
たれる成へしと云く凡哥を詠ぜんときは心を山川万里に
めぐらし情を禽獸草木に等して趣向をもとむへき也、上古

ハ哥の題もさたまらず、詞書にて詠せしかとも中比より
題を定られぬれハ題を取て詠し習へきなり、先題の心をよ
くく心得る事肝要なり、たとへば立春の題にて早春初春
ハよむべからず、早春初春の題にて立春をよむハつねの事
也、立春ハ正月一日にかきるゆへなり、初春と早春とは同
事にて五六日より十^(四オ)五六日までと心得へし

立春

忠岑

春たつといふはかりにやみよしのゝ山も霞てけさハみゆら
ん

慈鎮

芳野山初春風の今朝ハ先さくらかえたをいかぐとふらん

初春

貫之

春立て風やとくらんけふみれば滝の水尾より玉ぞちりくる

匡房

水鳥のうきねの床の春風に氷のまくらとけやしぬらん

早春^(四ウ)

順徳院

風吹ハ峯のときは木露落て空より消る春の淡雪

伏見院

春といへゝハ思ふ物から風ませに深雪ふる日ハいと寒け
し

(二行空白)

此外さま／＼侍るめれとも皆古人の申ふるし侍れハこれを略しぬ、すへて春秋の哥ハいづれも面白き事を尺せんとよむへし、夏冬の哥もそれ／＼の題によるへし、恋のうたはずいぶん情をふかく幽艶にあるへきなり、山居ハ山住なり、山里にはすこしかはるへし、水郷ハ水の里なり、淀よしの川近江の海によみならはしたり、また名譽ある題を態異名をもとめて鹿をすかるとよみ草をさいたづま萩を鹿鳴草とこのむことそのせんなし、蛩をなつむしと詠するハうちまかせたる事なれどもそれも後撰の哥に、

八重むくらししけるやとは夏虫の声より外にとふ人もなし

この哥ハ蟬と聞えたり、されど夜半の夏虫とも」(五ウ)おもひがもゆるなとよむ也、ぼたんをふかみ草紫苑を鬼のしこ草蘭をふちばかま、かやうの声のものは異名なれては叶べからず、又声にて用事もあまたあり、国の名名所の中にいひふるしきよき事共有ハ別義也、名所をよむ事つねに聞なれたる所をよむへし、但その所にのそみてよむハ耳遠からむもくるしかるまじきなり、築紫の染川にて、」

そめ川をわたらん人のいかでかハ色になるてふ事のなか

らん

津の国つゝみの滝にて

音にきくつゝみの滝をうちみれハたゝ山川のなるにそ有ける

大淀の浦には今ハ松もなく住吉の松にも波ハかけねとも猶いひふるしたるすちをよむへし、長良橋などはむかしより絶しかハ事ふりたり、無水川水ありとも水なしとよむへしとそ、花にはよし野紅葉には竜田幾度もくるし」(六ウ)云く、抑此道にいらんには詠哥大概を心にかけて師にもきゝみつからもじゆくときすへき事也、此書は中納言定家卿の作なり、百人一首雨中吟未來記を合て三部抄と云て二条

家冷泉家の骨すひ也、就中詠哥大概ハ梶井宮尊快親王後鳥羽院第八の王子、山門の座主なり、三十首の哥を詠して定家卿へ添削を乞給ひけるに風躰あしきよしの給ひけれハさらバ」(七ウ)よみやうを記してまいらせ給へとありし時しるしまいらせられて猶末

代の学者のために残し置給ふもの也、これによりてここに詠哥大概をしるし侍る注ハ宗祇抄、幽斎抄、世におこなはれ侍れとも宗祇抄ハ聞書を板行せるもの故ざまく也、幽斎抄ハ事繁多にして初心の人これを見まとも故此末に予か聞をける大意を記して幼学の人に示ス」(七ウ)

詠哥大概

情以新為先求人未詠之心詠之詞以旧可引用詞不可出三代集

先達所用古今古人哥同用之

風跡可憐堪能先達之秀哥

不論古今遠近見宜哥可倣其跡

近代人所詠出心詞雖二句謹可除三弃之

七八十年以來人所詠出之心詞努不可取用之

於古人之哥多以其同詞詠之已為流例但取古哥詠

三新哥夏五句中及三句者頗過分無珍氣二句之上三

四字免之猶案之以同事詠古哥詞頗無念歎

以花詠花以月詠月

以四季哥詠戀雜哥以戀雜哥詠四季哥如以此之時無

取古哥之難歟

足曳の山ほとゝきす みよしのゝよしの山

久かたの月のかつら ほとゝきす鳴やさ月

玉はこの道ゆき人

如以此之事全雖二不憚之

年の内に春ハ来にけり 月やあらぬ春やむかし

桜ちる木のしたかせ ほのゝとあかしの浦

如以此之類雖二句更不可詠之

常觀念古哥之景氣可染心殊可見習者古今伊勢物

語後撰拾遺三十六人集之内殊上手之哥可掛心人磨貫之忠尋

伊勢小町等類也

雖非三和哥先達時節之景氣世間之盛衰為知物由白氏

文集第一第二帙常可三握翫深通三和哥之心

和哥無三師匠唯以三旧哥為三師染三心於古風習三詞於先達

者誰人不詠之哉

(九ウ)

詠 尚書に言を永すといへり、字の篇つくりに見えた

り、言をなかつすとは長吟なり、

哥 釈名に人声曰歌柯以声以詠如三有草木柯葉

云、無心の草木も枝葉をむすべこそ何の木何の草とも

知らるなれ、しからずハ一向枯木枯草ならん、そのすが

たゝに枝を生し葉をしけくす、是草木の上の哥也、人

として風雅のおもひなく詠吟なくハ草木の枝葉なく花

実をしらざるがことし、されハ花のハ心色にあらはれ

水の心は音に顯る、眼をつくへきなり、

大概 十のものの八九といふ心なり、たとへを以ていは

ゝ家々の庭訓の其数多きを網の目にたとへ此書に詠哥の

故実大略備るを大綱にたとふへしと也、よつて大概ハ
大綱也ともいへり、（たいかう おほづな）

情以新爲先、（ハナツナリニ）性理字義云情、性動也、寂然不レ動是

性也、感而遂通是情也云々、（十ウ）

新韻會斯鄰切辛對旧之稱云々、

此一字五字ハ是一部發端の詞なれハ容易にハおかれま

し、尤甚深の意あるへし、學者眼を付へき所なり、大か

たハ宗祇幽斎の抄に見えたり、畢竟情といふは哥を詠ず

る趣向の事と心得へきなり、爰に大事の口伝侍る也、古

来先達の詠しつくしたる趣向の外に後代末学のせはき胸

中より新しき心ハもとめえかたか（二一オ）るへし、しからはい

か、可心得といふに躰のふるきこゆる処をさけて風情

をあたらしくほとこする事を第一とすといふ心也、風情

新しくしたてやうさへめつらしくあれは情ハをのつから

新しきやうに聞ゆる也、情を新しくといふ事を末学のもの

のあしく心得てわかひとちから入てもとめすごせは異風

異躰になりて未來記などの躰になるへし、風情さへ新し

く（二二ウ）なれハ、こゝろハをのつから新しくなるもの也、此

さかひよく工夫すへし、ふぜいも新しく心もあたら

此処その一ヶ条也、
求三人未レ詠之心二詠之、（三）上の一句五字の注也、宗祇云
此詞誠に道の肝心なり、此心なくはいかてか作意といふ
事侍らん、道なき所にむかひて道を求め及はぬさかひに
望て新しくよまんと心がく（二二オ）へきなりと云々、此注一段面
白し、定家卿御心に叶へし、古今集の序にも、あるハ花
をこふとてたよりなき所にまとひあるは月をおもふしる
へなき闇にたとれる心くを見給ひ、さかしおろかなり
としろしめしけんとあるにも叶へき也、人とさすハ定家
已前の人、たとへは花を雲と見たる上に花といふものハ
毎春みれともいまたかくのことくの花ハみず、又月ハい
つも明白なれとも（二二ウ）如此面白き月ハみずと見たてたる所
が人のいまた詠ぜざる也、宗祇云但以下に先達見るによ
ろしくといふ詞をくはへていへり、學者可思慮者也と
云々、是ハ求三人未レ詠之心二見宜詠之、如此也、宗祇云
未レ詠心を求るといふに二つの心あるへし、先むかしより
かゝる作意なしと人のおどろく所、又常に人のよみなら
はしめにもかゝらぬ古めきはてたる心詞を少し引替あら
ぬ物に（二二オ）しなす事堪能の思所なりと云々、心を新しくとて
西より東へ月日の行なといはんハあたらしきにあらず、

西より東へ月の行とよみし哥

秋風^{あきかぜ}に宵のむら雲はやけれハ出にし方へ帰る月哉

此類也、心ハきこえたれとも風情過たるよし（せうみやういん）称名院も

仰られしとなん、古哥に、

直なる詞なからに新しき心をえやハやまと言のは（二三ウ）

少し引替て新しくなる証哥

内裏哥合に秋月 定家

いつハとはわかぬときはの山人もそらにおとろく月のか

け哉

此本哥ハ古今集に是貞のみこの家哥合のうた よみ人不知

知

いつハとは時ハわかねと秋の夜そ物思ふ事のかきり成ける

る

此うたをとれるなり、

定家

とひこかし立枝ハ梅の見えすとも句をこめてたつ霞ハ

此本哥ハ拾遺集に冷泉院御屏風の絵に梅花（四オ）ある家に客

人の来りたる所書たるに かねもり

我宿の梅の立枝や見えつらん思ひの外に君か来ませる

此うたをとれるなり、

少しの詞遣にて新しくなる証哥

小倉山しくるゝ比の朝な／＼昨日ハうすき峯の紅葉ゝ

昨日ハうすきといへる処眼也、もし色まさり行なとゝあ

らは新しからまし、かやうの処よく／＼工夫すへき事

也（四ツ）

詞^ハ以^ハ旧^ヲ可^レ用^ム

こゝろの上にて云時はこゝろか第一

也、詞の所にて云時ハ心が第二にて詞を先とし専にする

也、毎月抄云さらは情を先にせよとおしゆれば詞ハ次に

せよといふに似たり、所詮心詞相かねたらんをよき哥と

申へし、心詞ハ鳥の兩翅（うづ）のことく車の兩輪（りん）のことしと云

ゝ、以^ハ旧^ヲ可^レ用^ムとは則次の注のことし、

詞^ハ不^レ可^レ出^ツ三^ツ代^ツ集^ツ先^ハ達^ハ之^ヲ所^ヲ用^ム新^ハ古^ハ今^ハ古^ハ人^ハ哥^ハ同^ハ用^ムレ^ハ

上五字の注也、是ハ後世のものを詞を我まゝにせんとての

誠也、三代集とは古今（こきん）後撰（ごせん）拾遺（しゅうい）是也、

古今集ハ 人王六十代醍醐天皇、延喜五年四月十八日に、

紀友則 紀貫之 凡河内躬恒 壬生忠岑 撰（ス）レ之、

序貫之、真名紀叔望、哥数千九十余首、

後撰集ハ、 六十二代村上天皇、天曆五年十月（二五ウ）於（な）梨

壺、大^{（おほ）}中^{（なかつ）}臣^{（みこと）}能^{（よ）}宣^{（のたまふ）} 清原 元輔 源 順 坂上望城

撰^ム之、哥数千四百廿六首、

拾遺集ハ 六十五代花山院^{くはさんのいんご じせん} 御自撰、或大納言公任卿依^{きんとう}

勅撰^ス之とも云、哥数千三百五十七首、

所詮三代集を出べからずといふハ前の注のことく後世の者我まに詞をせんかとのいましめ也、詞のたゞしく清らかなるを以て作たつれば心も新しく風情もけたかく感^{かな}ふかきものなり、^(一六オ)

先達の所用といへるに二義あり、三代集の詞とて、ことく可^レ用にあらず、悪き詞を除き先達の用る所の詞斗を用へしと云注の意は一ツ、又定家卿了簡を以て今あらたにの給ふにあらず、先達の用る所なりといふ注の意已上二つ也、三代集の詞とてことく用へきにあらすとは、ちるぞめでたきわびしらにべらなりなとといふ詞の事也、新古今古人哥とは後撰より千載集までは^(一六ウ)上古のうたをいれす、新古今よりはじめて古人の哥をいれるるゝゆへなり、^{古今 後撰 拾遺 金葉 詞花 千載 新古今 已上八代集}

同用^レ之とは三代集に同古人の哥を用との義也、しかれハ今ハ新統古今^(一七)のうたなりとも古人のうたならは取用へき事明也、

風^{フウ}躰^{リキ}可^レ憫^レ三^三堪^三能^三先^三達^三秀^三哥^三 風^{フウ}躰^{リキ}と云は哥のすかた^(一)の

事也、心詞風躰是を三躰と云、風躰ハ則人にありてハ品

かたちのことし、此一句を三重に注せ^(一七オ)り、先堪能と云

ハ其道によく堪て器用と達者とを兼たるを云、先達とは器用と達者とを兼たる人にも道の伝受浅くして口伝のな

き人有、是ハ先達にあらず、道の伝受道統の人を先達と云故に堪能なれとも先達ならぬ有、先達なれとも堪能ならぬも有、此二つをかねたる人の秀哥にならへと也、秀哥

と云に又一重有。堪能にてしかも先達なる人も時に取て哥出来ぬ^(一七ウ)事有、さる程に手本と見習へきには堪能にて

先達なる人のよめる哥の中の秀哥を眼にかけて習へしとなり、宗祇云秀哥とは哥に取ては無上の事也、是第一

の難義也、其故ハ堪能の先達ならぬも秀哥をよみたる事ハあれともそれハ本とするにたらず^{行あたり}も也、堪能の先達

なれハとて毎度秀哥あるねハ堪能にして先達なる人の秀哥にならふへしと也、扱^(一八オ)その見習へき哥ハいつれぞと

云に下の小書のことく也

不^レ論^レ古今遠近^(一八ウ)二見^二宜^二哥^二可^レ憫^レ三其^三躰^三 古ハ万葉 古今

を指、今ハ新古今を云とそ、しかれハ今世にてハ新統古今^(一九)まてにもかゝるへし、宜^{よろしき}哥とは秀哥之躰大略^{ていたりやく}扱^あハ

百人一首の事也、又風躰のあしきをしるには雨中吟^{うちうぎん}未来

記也、雨中吟十七首未來記五十首則定家卿自詠置給ひて此風軀起らん時ハ此道のすたれたるとおもへとて誠（一八）

「置給もの也、是をうかがふべし、

近代之人所詠出之（一九）之（二〇）心詞雖（二一）一句謹（二二）可（二三）除（二四）三（二五）弃（二六）之（二七）

是より已前に心と云詞と云風軀と云、是にて哥の奥義ハきはまれり、是よりハ經文にもあることく欲（二八）三重宜（二九）此義（三〇）而說（三一）偈言（三二）の心なるへし、近代とは則此小字に云七十八

年とかゝれし時分也、其時分の人のわがものと粉骨をよ

み出たしたる詞ハ一句にても取用ゆる事なかれとの心

也、謹（三三）の字肝要也（三四）是制の詞とて、嵐（三五）をかすむ、花の

やとかせ、うつるもくもるなどの類也、是ハ皆其人の手

がらとよみ出たる詞なれハ也、猶末にくはし、

七八十年以來人所詠出之（三六）心詞努（三七）不（三八）可（三九）取（四〇）用（四一）之（四二）

是も上句の注也、近代とハ七八十年已前ぞとしらせたる

也、七八十年と指ハ宗祇抄には崇徳院の御代天治大治の

間近衛院の比成へしと云々、愚案するに此説少あたらず、

尤天治大治ハ崇徳院の年号なれ共（四三）今案するに先此書を

定家卿貞応二年六十二歳之時の作と定る時貞応二年より

天治大治迄ハ凡百年になる歟、七八十年と指ハ近衛院の

久寿元が七十年に当り天養元が八十年に当歟、此一句を

畢竟していは、心を新しく詞ハ古きにならば、近代の人

の心詞をへつらふへき事なし、されとも此処が哥の肝心

なるによりて猶委しく尺せらるゝ也、此段又肝要なり、人

の随分と新しく思寄て詠し出したる（四四）心詞を取ハ盜也、

三盜といふ事有、心詞姿をぬすむ事なり、

於（四五）古人哥（四六）者多以（四七）其同（四八）詞（四九）詠（五〇）之（五一）已為（五二）三流（五三）例（五四）

いにしへハ古人の哥の同し詞を以て新哥をよむがながれ

来りたる例のやうになりたる也といふ心也、たとへハ、

とふ人もなき宿なれと来る春ハ八重むくらにもさはらさ

りけり（五五）古今集に貫之のうた也（五六）

八重むくらしけれるやとのさひしきに人こそ見えね秋ハ

来にけり（五七）拾遺集に惠慶法師の哥也（五八）

かくのことくの類也、しかれども中比よりきひしく成た

るなり、

但取（五九）古人哥（六〇）詠（六一）新哥（六二）事五句中及三句（六三）頗過（六四）分（六五）無（六六）珍（六七）

氣二二句之上三四字免（六八）之猶案（六九）之（七〇）

古哥を取事第一の大事也、或ハ詞を取て風情をかゆるあ

り、詞を取て心をかゆる有、心詞なから取て（七一）物をかゆ

るあり、風情を取ハみくるしき事也、

足引の山桜戸をあけ置てわかまつ人をたれかとゝむる

これを取て続後拾遺恋の哥に 定家

足引の山桜戸をまにに明て花こそあるし誰を待らん

又後撰雜三 松垣女がうたに、

年ふれハわかくるかみも白川のみつはくむまで老にける

哉

これを取て、定家卿拾遺愚草の哥に、^(三二ウ)

年ふれハわか黒髪もしら糸のよるハ仏の名をとなへつゝ

如レ此の類也、五句中三句におよばゞとは五七五七ミの

物なるを三句までひしと取たれハ人の詞がかちてわか詞

ハすくなし、故めつらしげなしとは云、二句の上三四字

免之とは三句まで古哥の詞を取うちにて三四字ハゆるすと

也、やがて前の哥皆二句のうへにて三四字とられたり、

猶案^{モトメ}之とある詞眼を付る所也、前の哥ごとときハ三句め

の^(三三ウ)中にて三四字取たり、かくのことくもくるしからね

どもさやうに取てめつらしげなくは二句めの七文字の中

にて三四字とれとの事成へし、さる程に爰の処をあんぜ

よとの教なり、よく／＼工夫すへき処也、

以^テ同^シ事^ヲ詠^フ古^ノ哥^ノ詞^ヲ頗^ル無^ク念^ス歟 以^テ花^ノ詠^ヲ花^ノ以^テ月^ノ詠^ヲ月^ノ

則

此注のことく花の哥を取て同し花のうたをよみ月のうた

を取て同し月の哥をよむ^(三三ウ)事也、定家卿の時分おほかる

にや、しかれハ恋のうたを取て同し恋のうたをよみ雑の

哥を取て同し雑の哥をよむも又しかなり、

以^テ三^ノ季^ノ哥^ノ詠^フ三^ノ恋^ノ雜^ノ哥^ノ以^テ三^ノ恋^ノ雜^ノ哥^ノ詠^フ三^ノ季^ノ哥^ノ以^テ三^ノ季^ノ之^ノ時^ノ

無^ク取^ル三^ノ古^ノ哥^ノ之^ノ難^ク歟 文義明なり、たとへハ、

朝日かけ句へる山の桜花つれなく消ぬ雪かとそ見る

これも本哥ハ万葉に、^(三三オ)

朝日かけ句へる山の桜花あかさる君を山こしにして

かくのことくの類あげてかそふへからす

足引の山時鳥^ミよしのゝよしのゝ山^久かたの月のか

つら 時鳥鳴やさつき

如^レ此之事全^ク雖^モ何^レ度^モ不^レ憚^ラ之^ヲ

このたぐひハむかしよりおほくよみならはし粉骨もなき

詞なれハ幾度よみてもくるしからすとそ、^(三三ウ)

年^ノのうちに春ハ来にけり 月^ノやあらぬ春やむかし 桜^ノち

る木のした風 ほの／＼とあかしの浦 如^レ此之類雖^モ三^ノ二

句^ノ更^モ不^レ可^ク詠^フ之^ヲ

前には二句の上三四字免^レ之とあるに付て、取てくるし

からぬと又悪きとを教られたり、足引の山時鳥の類ハ幾

度もくるしからす、此年のうちに春ハ来にけりの類ハ二

句なれとも皆名人の詠せし秀句なれば取へからすとのねんごろの^(二四オ)を^レしへ也、

常觀^ニ念^ニ古^ノ哥^ノ景^ノ氣^ニ可^レ染^ム心^ニ 宗祇云此道の好士可^レ思者

此段也と云々、心詞に及さる妙処の風情ある哥を觀念して心に染る時はをのつから其風情にうつるへしとの教也、

心に染まると云処肝要也、たとへハ、

ほのほのとあし^(マ)の浦の朝霧に島かくれ行船をしそ思ふ

田子の浦にうち出てみれハ白妙の富士の高根に雪はふり

つゝ^(四ウ)

春たつといふはかりにやみよしの山も霞て今朝ハみゆらん

これらの哥の景氣を觀念すへき也、

殊可^ニ見^ニ習^ニ者^ハ古今伊勢物語後撰拾遺三十六人集之内殊

上手之哥可^レ掛^ム心^ニ

常に古哥の景氣を觀念する上に殊に見習へきものハとの義也、伊勢物語を古今の次後撰の前に置事古今ハ此道の肝心也、伊勢物語ハ古き物語なれハ三代集の末には置かたく古今の次に置給^(二五ウ)もの也、三十六人集とは人丸をはしめ乃^{ナシ}至中務まで三十六人の哥とて公任卿のえらひおかれしなり、此衆中をのく家の集有、是を三十六人集と

はいへり、其中殊に上手の哥をと云心也、其中の上手といふハどれくそと云時則小書にある人丸貫之忠岑伊勢小町など也と教たり、類の字にまだ此外にも此五人の哥人にならふ人ある事をしらせたり^(二五ウ)

雖^レ非^ト和^ノ哥^ノ先^ニ達^ニ時^ノ節^ノ之^ノ景^ノ氣^ノ世^ノ間^ノ之^ノ盛^ノ衰^ノ為^レ知^ニ物^ノ由^ニ

白氏文集第一第二^二帙^一常^ニ可^レ握^ム腕^ニ 深^ニ通^ニ和^ノ哥^ノ之^ノ心^ニ

白氏文集ハ白楽天か集也、白ハ姓、楽天ハ名、若年より

も長慶年中までの詩文を集て白氏長慶集と云、五十巻にて五帙とす、長慶已後のをくはへて七十五巻とし白氏文

集と云、今世に行はるハ七十一巻十帙とせり、楽天ハ唐^カ

人なれハこれ^(二六オ)和^ノ哥^ノの先^ニ達^ニにはあらねとも文集ハ詞^ウ幽^ウ艷^ウ

にして情ふかきもの也、殊に第一第二の巻には王昭君上

陽人琵琶行長恨哥などゝてあはれなる事とも侍る也、さ

るによりてこれとりもてあそへと也、小書にもふかく和

哥の心に通すとかゝれし誠にむへなり、時節の景氣世間

の盛衰すへて心を道に引いるゝなかつた也、春のあした

花のちるを見、秋の夕木の葉のおつるをきゝ、あかつき

のしきの^(二六ウ)は^ニね^ニか^ニき^ニを^ニか^ニそ^ニへ^ニ、朝の露夕の煙野山草木等

の事に情をうつす処か肝要なれハ也、源の頼政ハさしもの

哥人也、風のそよと吹、鳥の一声なき、まして花のち

り木の葉のおつるにつけても心をめぐらすといふ事なし、誠に秀哥のいてくることもはり也とそ俊恵も申されしなり、宇治川の戦にさしもいそかしかりし時、

伊勢武者ハ皆ひをとしのよろひきて宇治のあし」(二七オ)ろにか

ゝりける哉と詠せられしハ常のものゝ及へきにあらすとそ、惣して哥ハ時の景氣が大事也、大和物語にいはく、

泉大將殿左のおはいとのへまうてたまへりけり、外にて

酒なとまいり酔て夜いたく更てゆくりもなくものし給へ

り、おとどおとろき給ていつくにもものし給ふ便りにかあ

らんと聞え給てみかうしあけさはくに壬生忠岑御供にあ

り、みはしのもとに松ともし」(二七ウ)なからひさまつきて御せ

うそこ申、

かさゝきのわたせる橋の霜のうへを夜半にふみ分殊更に

こそ

となんの給ふと申、あるしのおとどいとあはれにおかし

とおほして其夜一夜おほみきまいりあそひ給て大將にも

ものかすけ忠岑にも録給てけりとなん、これハ時節の景

氣をよく申なせり、又仁和の御門せうかは芹川の行幸に 在原行

平

おきなさひ人なとかめそかり衣けふばかりとそ田鶴もな

くなる」(二八オ)

行平狩衣に鶴をぬはせてきたりけれハをのかよはひを思

ひてよみたれとも御門五十七にならせおはしけれハ御身

の上におほしめしとかめて御けしきあしかりけりとなん、

和哥無ム、師匠シ匠シ兄イ以ミ三ミ旧哥キウカ、為ス師染シヤン心シン於ニ古風コフウ、習シヤブ詞シ於ニ先

達タチ者モノ誰タレ人ヒト不レ詠メ之ノ哉ヤ

宗祇曰此詞始に立かへり和哥の大筋目をいへる也と云く、

愚案古今序やまとうたハ人の心をたね」としてよろつの

言の葉とそなれりけるといへり、されハ人のこゝろをた

ねとするか本なれハその処に師匠ハあるましき也、春の

花を雲と見、秋の紅葉を錦とおもひ都て四時の風雅に情

のうつりて邪念なき処か直道にて則和哥の本跡なり、そ

の場を師とし詞を先達に習外に別に師なしと云心なるへ

し、猶ふかくこれをおもへと也、」(二九オ)

II 『歌道読方和調海』五所収「詠哥大概之事」

(底本 都立中央図書館蔵加賀文庫本(加賀文庫・六九二七・五))

垣根梅

てにハ秘傳抄

よみかた和かのうみ

五 (刷題簽)

哥道讀方和調海五 (内題)

詠哥大概之事

此書ハ中納言定家卿堀井宮尊快親王の御所望によりて記して参らせ給ふと也、此みこハ後鳥羽院第八の王子と(マデ)韶運録に見えたり、後鳥羽院御子のあまた在し中に此親王は順徳院と御同腹にて御門の御愛子なるよし也、此みこ初三十首の和哥を詠せられ定家卿へみせ給ひしに風躰あしゝとていさめ給ふ、さらはよみかたをしるしてまいらせよと(マデ)仰有けるゆへ此書をしるしてまいらせ給ふと也、尊快親王ハさせる作者にあらず、哥数も見えず、続後撰に一首読古今に一首統拾遺に一首是等の集に見えたり、宗祇抄に尊快親王末代に哥の道に御名不マデ聞マデといふ事不審有、佛も愚癡の衆生に對して説法有、又早世なりしにやと云々、此抄の心ハ仏愚癡の衆生に對して説法有時その衆生の名ハ末世に聞えねども仏の教ハ残るがことしとの事なるへし、これハあまりなる注(マデ)なり、又早生なりしにやと云、是等せんぎのたらぬ故也、都て宗祇三部抄ハ東野州常縁より古今伝受の砌その晦にきゝをける聞書を後に梓にちりはめ侍れハくはしからざる成へし、尊快親王ハ後に破戒し給へり、此事あらかじめ哥の風躰にあらはれし故定家卿いさめ給ふハ此ゆへなり、尤定家卿

の妙也、さるにより末代に御名不マデ聞マデ成へし、扱此書と百人一首と雨中吟未來記とを三部の書とて秘藏せるなり(マデ)、古来よみ方の書多しといへども初学より已達に通して是にしくものなし、此書述作の比に付て定家卿年齢の沙汰有、宗祇注にハ六十二歳の比歟と云々、幽齋抄に後堀川院貞応二年壬午六十一歳也、彼より後の事たるへき歟と云々、考るに後堀川の貞応壬午ハ即位の年にて元年也、二と有ハ享伝の誤なるへし、定家ハ二条院の応保二年壬午に誕生也、貞応元壬午則六十一歳に当れり、畢竟此書の奥書に(マデ)「昧の覚悟に随ひこれを書連とあれハ老後の事勿論なり、題号に付ても両説有、詠哥之大概と之の字を入て五字に書と除て四字に書と也、何も儘成本に四字五字共に有之、先定家卿御自筆の本四字也、又同自筆似せ書の本五字也、逍遙院殿自筆の本四字五字共に有之、淨満寺准後の御説にハ之の字入たるハ逍遙院説也、用之云々、三藐院関白の御説にハ惣じて題号に置字入たる其例なし、不マデ可マデ然マデ事(マデ)なり、」と称名院殿の御抄に見えたり、然ハ御父子の説相違に聞ゆれとも古本に之の字入たる本にて書写の時ハ五字、又不マデ入マデ本にて書たる時ハ四字にて可マデ畢マデ竟定家卿自筆の本四字なれハ之の字入

て宜敷子細なくばかた／＼四字可然歟、依^レ之^ニ今世に所^レ用皆四字也、又一説に最初外題となしに詠^{スル}哥^ヲ之大概と書て清書の時除たる歟、奥にも秀哥之躰大略と之の字入て有^レ之、しかれハ四字五字兩説と可心得にや、又此書假名^(三ツ)に定家卿自筆に書給ひし本有^レ之、真名とは少々相違有^レ之、此本冷泉家に御所持也、それにハ詠和哥大概と有、和の字入たるハ聞不^レ宜、故に真名に書給ふ時ハ除かれたるなるへし、件の本にハ阿仏奥書有、京極黃門定家卿堀井宮へまいらせられけるとなん、誠にゆへあるかな、可秘／＼云々、

〽詠 宗祇注に詠の字ハ尚書に言を永すと云々、長吟する所が詠哥也、毛詩ニ詩者志所^ノ之也在^レ心為^レ志發^レ言為^レ詩情動^ハ於中^ニ形^ル於言^ニ玄^ニ之^ノ不足^ニ故嗟^ニ數^ノ之^ノ嗟^ニ數^ノ之^ノ不足^ニ故詠^ニ哥^ノ之^ノ詠^ニ哥^ノ之^ノ不^レ足^ニ不^レ知^ニ手^ノ之^ノ舞足^ノ之^ノ踏^ニ〽歌 同注ニ釈名云人声曰^レ歌歌柯也以^レ声吟詠^{スル}如^レ有^ニ草木柯葉^ニ也、今釈曰詩云志所^ノ之トハ一念起^テ不^レ止云情動^ニ於中^ニトハ物ニフレテ起情ヲ云中ニ動クハ心内形^ニ於言^ニハ心外手舞足踏ハ詠ノ場也、毛詩ニ用^ル詠哥モ二字ヲ畢竟シテ同意也、増韻ニ詠哥ハ謳吟也と云々、うたひ吟する事也、日本にてハ神楽催馬樂の類也、楽に合するを歌

と^(四ウ)云、源氏紅葉の賀に源氏の君青海波を舞給ひし時の事を書とて、楽の聲まさりもののおもしろきほとにおなし舞のあしふみおももちよにみえぬさまなり、詠なとし給へるハ是や御仏の迦陵頻伽の聲ならんと聞ゆと云々、詩の詞を糸竹にうつすを楽といふ、今も禁裏に正月御会始に披露發聲と云事有、吹物にあはせらるゝ事も有、されはあしくつゝけたる哥ハこは／＼しくうたはれぬ也、古人の秀^(五オ)哥何も能合也、徐氏曰其声引誦^ヲ謳吟^ト云ト云々、井蛙抄に云哥ハ只よみあけもし詠しもしたるに何となく艶にもあはれにも聞ゆる事有へし、もとより詠哥といひて声に付て能もあしくも聞ゆる也と云々、三光院の御説にも哥ハよみあけなとし吟しなとして聞ハ必善惡聞ゆるものなりと云々、尚書に言を永すと云も其心を云あらはす処を云也、詩と哥と全く同し、声を引てうた^(五ウ)ふ也、古今集の序に抑うたのさま六つなり、唐のうたにもかくそあるへきと云々、釈名に人声を歌柯と云とハ柯へえたたとよませたり、無心の草木も枝葉をむすへハこそ何の木何の草とハ知らるなれ、しからずハ一向枯木枯草ならん、その姿に枝を生し葉をしけらす、是草木の上の哥也、人として風雅のおもひなく詠吟ノ心なくハ草木の枝葉なく花実を

知らざるかことし、されは花の心ハ色に顯れ^(六才)風の心ハ音に顯る、眼を付へき事也、抑哥は此国の風也、既に天地分れし後伊弉諾尊^{いざなのみこと}伊弉冉尊^{いざのみこと}天浮橋^{あまのうきはし}の上に立給ひて天瓊矛^{あまのとうぼう}を以て滄海^{あやうなはら}をかきさぐり給ひしにその矛のしたよりこりておのころ島となる、二神彼島にあまくだり給ひて為夫婦^{みとのまけはひ}して州国^{くにづち}を生んとておのころ島を国の中のみはしらとしてわかれめぐり給て陰神^{かみ}先となへてのたまはく、あなうれしにへやうまし男にあひぬ、陽神^{やみ}次にとなへ^(六才)てのたまはく、あなうれしにへやうましおとめにあひぬと、是哥のおこり也、しかるに国いまたならず、たゝあはのことくなる島のみ出来ぬ淡路島^{あわじ}是也、二神此事を御心にこゝろよからず、高天原にいたりて天神にありさまをうつたへ給ふ、天神ふとまにを以てうらへたまひおしへての給はく、陰神の詞既に先立ゆへ也、むへあらため廻るへしと、依^よ之^の又^{また}おのころ島にくたり給ひ此度ハ陽神先となへ次に陰神^(七才)となへ給ふ、これより大八島豊芦原ノ中津国も出生し天照太神姪子^(八才)素盞鳴神もあれまし山川草木もことくく出生す、されハあなにへやの詞を天神にうつたへ給ふ故に哥といふ訓ハうつたふるといふ詞を略してうたといふ、又陰神の詞先立しをうらを

以てしめし給ふゆへにうらつたふといふ詞を略してうたといふともいへり、扱又下照姫と申ハあめわかひこの命の女神也、あめわかひこうせ給し時せうとの^(七才)「あじすきたかひこねの命のかたち岡谷にうつりてかゝやくをみて、あもなるやおとたなはたのとよみ給ひしなど、是等ハ天神の御うた也、地神にいたりてハ、素盞鳴命出雲にいたりて、八雲たつの神詠これ卅一字の始也、しかつしより人の代に及てさま^(八才)の軀をよみ出せり、所謂長哥短哥旋頭混本折句俳諧踏冠廻文等也、長哥の中にもきらふに四病八病を立、好むに九品十軀等のしなを分てり、委細云^(八才)」にいとまあらず、

ハ大概 幽斎抄に問答を挙げたり、云問、此書の題号大かたといふ心の理ハ明らか也、大概と云分限如何、答若別々に數量を以ていはゞ世俗に十のもの八九と云義也、大概のたとへハ家々の庭訓の其数の多きを網の目にたとへ、此書に詠哥の故実大略備るを大綱にたとふへしと云と、抑定家卿此詠哥大概を述作し給ふ本意は^(八才)「これより已前によみ方の書有といへとも事しけきのみにして志趣委しからず、故に事を梶井宮の所望によせて道を後世にのこ

し給ふ也、誠に詞みちかく心深く作せらるゝ事道のひじりのしわざ成へし、初めに情^ハ以^レ新^ヲ為^ス先^トといひて小書に求^テ人^ヲ未^ダ詠^セ之^ノ心^ヲ詠^セ之^ノといふ趣向ハ毎度新しかれとの教也、詞^ハ以^レ旧^ヲ可^シ用^ムといひて小書に詞^ハ不^レ可^シ出^ス三代集^ニ等といひて古今後撰拾遺の直なる詞をとり用よと教、古人所用^{（九才）}といひて此三代集の中にも古人の用来る詞のみをとるべき理りを明せり、それハ三代集の詞とて、ことく可^シ用^ムにあらざる事有、ちるそめてたき、わひしらに、へらなりなどのたくひなり、されは古人用來詞ハ新古今といふとも可^シ用^ムよし也、風^ハ軀^ハ堪^ハ能^ハ先^ニ達^ス秀哥^ニに^{（ならぶ）}倂^ヘしといひて小書に不^レ論^ス古今遠近^ヲ見^テ宜^シ哥^ヲ可^シ倂^ス其^ノ軀^ニとて秀哥之軀大略を出し百人一首を撰ひ給ふ、先達なればとて毎度秀哥^{（九才）}ハ有^{マシ}けれハ堪能にして先達なる人の秀哥にならへとくはしきをしへなり、猶本書を見て文々句々深意をさとるべき事也、先題号に付て習、本文に入て三ヶの習有也、情^ハ以^レ新^ヲ為^ス先^ト、二句ノ上三四字免^ス之^ノ、二ヶ、和哥無^シ師匠^ニ三ヶ、此三ヶ所習有事なり、道統の人に逢て可^シ習^ムもの也

〔補記1〕 刈谷図書館蔵本（二六四四・一・三甲五・七八九）一冊本

に拠る。『歌道読方和歌海』に吸収・改変される以前の本来の序文（註11参照）の末尾には次の年記あり。

于時元禄十六癸未季春日於素兄堂書之

刊記は次の通り。

元禄十六未季春下旬

洛陽二条通観音町

書林 平野屋佐兵衛板行

なお飯田市立図書館蔵本（図書六）は板本の写し。

〔補記2〕 国立国会図書館蔵本（二〇九・三二五）一冊本に拠る。

同本はIの翻刻の底本とした加賀文庫本と全く同一の体裁。表紙の文様も一致する。表紙中央の刷題簽に「哥道岸の姫松」とある。『歌道読方和歌海』では省略されている本来の序文は次の通り。

哥道岸の姫松序

師走の月のすさましき比、さむしろに埋火を友として哥をよめる次てに、詠哥大概より源氏物語まで六つのふみの大意をしるし、初学の人をして其書に入安からしめんとす、此書どもハ我みても久しく成^{なり}、註尺往々に侍れハ、今新^{あらた}に大意を述るも煩はしけれど、猶此道ときはかきはにはびこり君さかえ応やすかれとことふくより、哥道岸の姫松と題して書林にあたへ侍るものならし

洛下素兄堂

止静述

于時宝永元甲申

臘月下旬

国会本は刊記の面失われている。刊年の宝永二年は、伝本を蔵する東北大学附属図書館目録に拠る（同本未調査）。

〔補記3〕 九州大学図書館蔵音無文庫本（五一・テ・一三）に拠る。同本は統一五・七cm横一・二cm、すなわち『歌道岸の姫松』『歌道読方和歌海』等と同体裁の小本一冊。『歌道読方和歌海』にも見える奥書、

右のてにはハ家伝の秘事也、師誤のむねにたゝしあはせてこれをしるし、以世につたへ侍るものなり

の後に、次の刊記が見える。

宝永二乙酉年

九月下旬

書林 洛陽三条小橋

辻勘十郎
同源七郎

江戸大伝馬町 本屋喜太郎

本書には京都大学文学部文科閲覧室蔵本（国文学・五C・五四）、国会図書館蔵亀田文庫本二本（八一五・七・H三三W、八一五・七・Te一四六）の写本、また三ヶ尻浩『手爾乎波研究古典集』（一九三五私家版）に翻刻が存する。いわゆる『姉小路式』を『歌道秘蔵録』『春樹頭秘抄』同増抄等とは別途の経路で増補した本と見られる。素兄の所為と考えるときの問題と併せて、その性格については別の折を期したい。

付記

翻刻を許可された高岡市立中央図書館ならびに都立中央図書館に対し
深謝申し上げる。
なお小稿を成すに当って昭和六十二年度跡見学園特別研究助成費の援助を得た。